

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	宝徳元年本『僻案抄』翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1984
Jtitle	三田國文 No.2 (1984. 3) ,p.57- 79
JaLC DOI	10.14991/002.19840300-0057
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19840300-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宝徳元年本『僻案抄』翻刻

石川 透

解題

『僻案抄』（藤原定家撰）宝徳元年写 伝二条政嗣筆 慶応義塾

大学付属研究所斯道文庫蔵 函架番号092.7.32-1

袋綴、一冊。表紙は、朽葉色地、又、紺地に葡萄唐草、扇面草花、市松模様等の古裂の綴り。縦二五・二センチ横一七・二センチ。表紙中央上の題簽に「僻案抄」とある。内題は無い。料紙は二種あり、一つは斐紙、一つは薄様斐紙で、每半葉八〜九行。字面の高さは約二三センチ、ただし注文は一〜二字下げである。一行の字数は二十〜三十字程度。墨付丁数五十丁、巻末に遊紙が一丁ある。

料紙の二種類については以下のように区別される。

A 斐紙 1〜26丁 30〜37丁 40〜45丁

B 薄様斐紙 27〜29丁 38〜39丁 46〜50丁

ただしB料紙の部分において、27〜29丁、38〜39丁は每半葉八行、注文は二字下げで筆跡はやや大ぶりである。同46〜50丁は每半葉十行に書写されている。しかし、A Bともに同筆と認められる。本書の筆については、一丁表に極札が貼付され「二条殿政嗣公僻案抄一冊」とある。筆者については後記する。

奥書においても、A B料紙には一箇所ずつ次の如き奥書がある。

A料紙の奥書は

往年治承之比古今後撰両集受庭訓之口伝年／序已久雖恐忽忘先達古賢之所注後代之所見（44ウ）猶非其失況依恥管見謬說故不載紙筆／今迫耄及之期顧余喘之尽至于愚老之没後／為散遺訓之蒙昧最要密々所染筆也更莫／令他見

權中納言定家卿（別筆添紙）

戸部尚書判（45オ）

とあり、B料紙における奥書には、

往年治承之比古今後撰両集受庭訓之口伝年／序已久忽雖恐忘先達古賢所注猶非無其失況／依恥管見謬說故不載紙筆今迫耄及之期顧／余喘之尽至于愚老之没後為散遺孤之蒙昧抽最／要密々所染筆也莫令他見

嘉祿二年八月 戸部尚書在判（50オ）

此草注付之後拾遺相公一人之外更不令外見／至于嘉禎四年忝依承旧好之 論言遙付嚮／北之雁足

本奥書云

貞治三年三月十八日書写之 鶴白武衛藤在判

此本不足之所在之間申入室町殿御本書加之畢

宝徳元年十月九日(50ウ)

とある。これをみると、B料紙の奥書の前半は、A料紙の奥書とほぼ同文である。また、B料紙の奥書から、本書は不足の部分を補った本であることが明らかである。

本書の内容については、川平ひとし氏『僻案抄』書誌稿(一)、『跡見学園女子大学紀要』第一六号、一九八三年三月)に既に紹介されている。川平氏は、『僻案抄』の伝本をその識語から三つに分類され、本書を「一類本の原態を追究する際の有力な資料」であると述べておられる。一類本とは本書でいえば、A料紙にみられるような奥書をもつ本のことである。この川平氏の御考察に沿いながら、本書が一類本としてどのような位置にあるのか、一類本の原態を最もよく残していると考えられる高松宮蔵有栖川宮旧蔵本との比較を中心に小論を試みたい。

高松宮本は定家自筆本を忠実に模写したものと推測されているが、その本文の中には、訂正、書入等が見られる。本書には定家風の筆遣いはみられないが、高松宮本と同様な、訂正、書入等が点在している。それも、

申す『せとも此哥はことに鶯ときこゆれと』鶯の哥には(2ウ)
思給也『いはむとおもはん人は心にまかせていひなすへしたか
ひにしろへからす』(8ウ)

てらのまへなるや』とよらのてらのにしなるや』えのはぬに

(19オ)

大納言本にも『かくかゝれたれはたゝふるからむ説にこそつか
め』すへて此集(40ウ)

等のように、消去、または訂正箇所の中でも、比較的長文のものにおいて高松宮本との一致箇所を見出すことが多い。また、15丁ウ16丁オの上方にある、

清輔朝臣奥義年書出此哥不釈後人皆うみへたと存歟

の書入れは、改行の体裁におけるまで一致している。さらに、歌順においても次の如く一致する。すなわち、

おきなさひ人のとくめそかり衣けふはかりとそたつもなくなる

(36オ)

の歌が、

てる月はまさきのつなによりかけてあかすわかるゝ人をつなか

む(36オ)

の歌の前になるという訂正指示をしている点である。概略以上の点は、他の一類本にはほとんどみられない特徴であり、高松宮本と本書とがいかに近親関係にあるかを示すものである。この他項末な点においても、例えば、漢字、仮名の使用文字の類似や改行等の類似も随所に指摘できるのである。

また、高松本には、一〇五字程度のわずかな訂正も散見される。

それは、本文を見せ消ちとし、その右傍に訂正文字を付記している。しかし、本書の当該箇所には高松宮本と同様な補訂はみられない。すなわち、3丁オの次の一例、

うくひすはなるへしとは「きこえぬにや」

の語句が高松宮本の訂正前の本文である以外は、大略において高松宮本の訂正後の語句に沿って書写されているのである。これが川平氏のいわれる「整序化」と呼ばれる現象の一つであろう。

これに続いて川平氏は、本書の奥書の特異性から、A料紙の奥書

以降（万葉歌の補記からB料紙の奥書まで）を、一類本とは別系統の本文によって書き加えられたものとされている。そして、

一類本のテキストには「かはやしろ」等を欠いている為、「不足分」を「室町殿御本」（足利義政本か）をもって書加えた。

その際、同本の巻末部分をも忠実に転載したという訳だろう。

と推論されるのである。万葉歌の補記は45丁ウから始まり、46丁から料紙がBに変化していることを考えても、川平氏の推論は正しいとすべきであろう。さらにいえば、料紙がBである他の部分も後からの補入と考えられる。特に、40丁オの冒頭に、

『物いひなとみたれたりにや又うつろはて・かにはるにあへり」とや心えず』

と消去符号が付されていることは、補入があったことをよく伝えている。すなわち、この部分は38丁オの冒頭部分とはほぼ同文であり、料紙が37丁以前と同じAである点や、全体的な字配りも考えても、40丁オは本来37丁ウに続く部分である。つまり、40丁オの掲出文「とにや心えず」と書いた以降に不足分があり、途中をとばして「此集の作者おほつふね」へと続けて書いたであろう。その際、37丁から40丁の間を別の本文により補うつもりで40丁の冒頭を消去し、その後別のBの料紙によって38丁39丁を補足したのである。

料紙の異同のみならず、本文上の仮名遣いの相違からも、B部分はA部分と明らかに異なっている。さらに、その内容上からみても、A B本文は別類本によって構成されていると判断される。例えば、B本文のうち、

うちきをきて春「きにけり」とおとろかる（27オ）

蘇武耿恭などを「思へる」哥なれば（27ウ）

「玉藻に遊」にほとりの（28オ）
なそくかたりと「かきたり」（39オ）

などは、一類本にはみられない本文である。一例として、45丁ウ以降と同様な本文をもつ、斯道文庫蔵江戸初期写本（函架番号〇一〇一）等と比較してみると（川平氏はこのような本文をもつ本を三類本とされている）、27丁39丁の本文は、それらの本とよく類似している。そして、A料紙に属する部分でも、B料紙に変る直前の26丁ウの本文には

ちようと「申され」けり

「外官除目」をあかためしと

「このゆへなり」

などのように、三類本の本文の特徴を示す箇所がある。しかし、これは、26丁ウ（あるいは26丁オ）の途中から既に一類本としての不足分があつて、その部分が空白になっていたため、区切のいい後撰歌以前までを27丁29丁と同じ本文によって補った、と考えれば納得できよう。ただし、補訂箇所が厳密にどの部分よりかを判断することは、猶、躊躇される。今しばらく、26丁ウの始めあたりよりというにとどめたい。

以上の補訂の他に、A料紙の本文には、行間に小字で傍記された箇所が目立つ。その傍記には「イ本」と記すものと無注記のものがある。両者の区別は判然としがたいが、ともにおおむね三類本の本文によって補った傍記であると考えられる。このような傍記がB料紙の本文には全くといっていいほど存在しないことを考えてみても、A料紙にみられる補入傍記はB料紙の本文と同じ本文によるものとすべきであろう。

以上のように、本書は、高松宮本と緊密な本文を有しながらも、猶、所々に高松宮本とは別系統の本によって補訂を施した一面を見出すことができるのである。

最後に、B料紙の奥書にみられる鶴首武衛藤という人物と、本書の書写者とされる二条政嗣について考えてみたい。鶴首武衛藤の鶴首は鶴首と通用させて使ったのであろう。鶴首であるならば蔵人頭のことである。また、武衛とは兵衛府のことである。藤は藤原氏を指すであらう。ここで、貞治三年三月十八日の時点において、蔵人頭で兵衛府の役人である、あるいは両職を経験した、藤原氏を捜してみよう。『公卿補任』の貞治三年の条をみると、

参議

正四位下、同為遠^三二十四月十四日代、元蔵人頭、同日右兵衛督如元。

故前大納言為定卿男。母。

という記述がある。これをみるかぎり、為遠が三月十八日の時点において、蔵人頭で右兵衛督であった可能性は大きい。為遠は定家の直系の子孫であり、『新後拾遺集』を撰んだ人物である。『僻案抄』を書写したことは十分考えられる。一つの試案として鶴首武衛藤は為遠ではないかと推測してみたい。二条政嗣は『公卿補人』『尊卑分脈』によれば、文明十二年九月に三十八歳で亡くなっている。これを信ずれば宝徳元年は七歳ということになり、本書が二条政嗣によって写されたとは考えにくい。書写者は正確には、未詳とすべきであらう。

凡例

一、翻字に当って、なるべく底本のおもかげを残すように努めたが、読み易くするために、以下の方針をとった。

- 1、注文は歌より一字、又は二字下げとし、明らかに改行している部分を除いては、続け書きにした。
- 2、丁数、ならびに表裏は、その末尾に(14ウ)のように記した。
- 3、底本の漢字・異体字はおおむね現行書体の活字に改めた。ただし、万と萬の区別は行い、哥は底本通りとした。
- 4、誤字、脱字等の誤りは底本通りとし、そのつど校異を付した。
- 5、手ずれ等による破損箇所は、大略の字数を□印で埋め、そのつど校異を付した。
- 6、底本にみられる消去符号「—」「—」等¹は、長文に及ぶ場合は『』をもって記し、数字程度のものは左にヒを付して示した。
- 7、「イ」又は「本」と記す校異は、別系統本との比較による補入と判断し、問題になる箇所を除いては校異の対象としなかった。又、「ひ」のように本行中に同字が傍記されている場合は、本行の誤読を避けるための付記と判断し、同様に校異の対象としなかった。
- 8、底本には声点が付されているが、その位置は判然としないことが間々ある。参考として記すにとどめる。したがって、声点は校異の対象としなかった。
- 9、校訂者による注意書きは(頭書)(別筆添紙)のように()を

もつて記した。又、校異の当該箇所には右傍に*を付した。

翻刻

古今哥

袖ひちて結し水のこほれるをはるたつけふの風やとくらん
ひちてとはひたしてといふ心也この詞昔の人このみけるにや古今
にはおほく見ゆ後撰にはすくなし今の世のうたにはよむへからす
とそいましめられし

春たては花とや見^ちえむ白雪のかゝれる枝にうくひすのなく

みらんとは見るらむといふおなし心也みるらんといはゞ文字おほ
かれは見らんとよめり事にしたかいてこのころなとか(1ウ)よ
まささらん万葉集にはおほくよめり見えむといふ説つけたる本あ
り*
*ちあゝへからす

心さしふかくそめてしおりければきえぬ雪の花とみゆらん

折ければをひとつの説居ければとよむへしといふ折ければにて下
句の心たかふへからす居も哥によむ詞なれときよからす折をも
ちあゝへしとそ申されし

かすかのとふひの野守いてみよ今いくかありてわかかなつみてん
かすかのとふひのといふことあり烽たてられるゆへといふそ
の(2オ)野をまもる人を野守といふ野をまもる人なれはいてみ
よいまいくかありてかわなつむほになるへきといふ也一説と
ふひの杜といふ不可用

もうち鳥さへつる春は物ことにあらたまれとも我そふりゆく

もうちとりとはうくひすともいふ又はるきてはさまの鳥きた
りさへつるとしておほくのとりをもうちの鳥といふとも申す『世と
も此哥はことに鶯ときこゆれと』鶯の哥にはなれて柳をへたてゝ
いれたるもおほつかなしされともうちとりと(2ウ)いふもうく
ひすはなるへしとはきこえぬにや

春くれは雁かへるなり白雲のみちゆきふりにことやつてまし

道ゆきふりとはみちゆかむついで心の心也万葉集にたまほこのみち
ゆきふりにおもはさるいもをあひみてこふるころかもふるくよめ
るうたの詞にて心うへし

はるの夜のやみはあやなし梅花いろこそみえぬかやはかくるゝ
あやなしとはたとへはかひなきことをあちきなくといふやうな

る詞也又物語などもあひなしといふこともおなしさまの(3オ)
事也ふるきうたをおほくみてことはつかへるやうは心うへし
たれしかもとめておりつる春霞たちかくすらん山のさくらを
たれしかもとめておりつるとは

たれしかも。たゝたれかとめてをりつるといはむとする文字のす
くなければたれかもといふ猶すくなければしなくてはたれしかも
といへる也然といふ説は僻事』を心えてをしていふ也』ふるきう
たにはかくいたつらなる文字をそふる也然の字ならばたれかしか
といふへき(3ウ)

桜花春くはゝれる年たにも人の心にあかれやはせぬ

このさくらはなのをきやうをさきにけらしなあしひきのといふお
なし事に心えてあかれやはせぬはいはれずあかれやはするとこそ
いはめといふ人ありけりむけに放埒の事也これは桜花とよひては
るのひさしき年たにも人にあかれよとをしふる心也かやうの事を

よく心えわくへし

はるかせは花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふとみむ

よきてふけとはのそきてといふ心也こゝろつからとは身のうへ□

(4オ) する事はみつからといふわかいふ事はくちつからわかつて
にしてたることはてつから心にてする事は心つからといふ也う

つろふとは花もなにも色のおとろへかたにかはりゆくをいふ也
まてといふにちらてしとまる物ならはなにをさくらに思まさまし

まてといふにとはしはしまてといふ事也やよまてもまてしはし
もおなし心也

いさゝくら我もちりなむひとさかりありなん人にうきめみえなむ

ひとさかりすぎなは人にうきめこそみえめさくらのやうにわれ
(4ウ) もちりなむといへるさせるふかき心もなしこれをいとさ

かりといふ文字かきたかへたる本を見つけて最と釈する説は不可用
物かきうつすとてあらぬ僻文字ともかきける物のことやうの本な

る草子を貫之か自筆といひて人すかしける物をもてなしていひ
てたるいたつら事也その本貫之か手にあらす

ことならはさかすやはあらぬ桜花みるわれさへにしつ心なし

ことならはとはかくのことくなるはといふ心也しもに花のこと世
(5オ) のつねならはといふこともおなし心也

みわ山をしかもかくすかはるかすみひとにしられぬ花やさくらん

しかもかくすか然もかくすか也さかもかくつかといふことはなり
いさげふは春の山辺にましりなんくれなはなけの花のかけかは

くれなはなけとはくれぬともなかむへき花のかけかは夜も花にま
しりてねなんとよめる也

春ことに花のさかりはありなめとあひみむことはいのちなりけり

有なめとよはあらむすらめともいふ也(5ウ)

花のこと世のつねならはすくしてしい・は又もかへりきなまし

此哥世のつねなくはとかきたる本あり・心はたかふましけれ
と猶つねならはとはこそ心もあらはにきこえめ

こまなへていさ見にゆかむふるさとと雪とのみこそ花はちるらめ
こまなへてはならへて也みちつれしたるよし也なめてともかくお

なし事也

おもふとち春の山辺に打われてそこともいはぬたひねしてしか

思ふとちとはおもふ人とちひきくしてそことさしてもゆかぬ(6
オ) 春の山にたひねしてしかとはしてしかなといふ詞はせはやと

思ことをしてしかなありにしかなとはいふ也
郭公ななくさとのあまたあれはなをうとまれぬおもふものから

ななくとはなれなくといふ心也あまたのさとをかけてなけは
おもへとも猶うとまといふよし也

やよやまて山郭公ことつてむわれ世中にすみわひぬとよ

やよやまてとはやしはしまてといふ心也郭公はしてのたをさとい
ふ鳥なれはこの世に我すみわひぬ我をとくさそへと(6ウ) いふ

よしの事つて也
さみたれのそらもとよろに郭公なにをうしとかよたよなくらん

とよろとはそらもうこくやうにといふ也よたよとはよるもしつま
らすさはきなくといふ心也

むかしへや今もさひしき郭公ふるさとよしもなきてきつらん
むかしへとは又たよむかしといふに文字たらねはむかしへといふ也

このまよりもりくる月の影みれは心つくしの秋はきにけり

此哥おほつかなき事なし例の本におちくる月とかき(7オ)たるをめてたき説といふ物ありをのかよむ哥もきまにくしなしきすかたことはをこのむ物はふるき哥をさへおのかうたのさまにつくりなす也月落とは山にいる月もおちくるとはいふへくもあらす月にかきらすおちくるといふ詞このみよむへからす

いつはとは時はわかねと秋のよそ物おもふことのかきりなりける

いつはとはいつとはわかねとといふを文字たらねはいつはとはいへり
白雲にはねうちかはしとふかりのかすさへみゆる秋のよの月(7ウ)
此哥かすさへかけさへ昔より兩説又二首哥などいふ明月いたれる時・のかけなきを本意とすはるかにとふかりのかすさへたしかにみえむこそ月のくまなき心にかなふへければ兩説ありともかすさへを用

わか門にいなおほせとりのなくなへにけさふく風にかりはきにけり此鳥さまく清輔朝臣等の人々説々をかきて事きらさるへしこのかりはきにけりといふにこの鳥雁といふ説はあるへからす時の景気秋風すしくなりゆくころにはたまきな(8オ)れきたりておとへゆく秋草の中におりゐて色もこ急もめつらしきころはつかりのそらにきこゆる当時ある事なればつねの人の門庭などになれこぬ鳥をとくもとめいたさてめのまへにみゆる事につくへしと思給也『いはむとおもはん人は心にまかせていひなすへしたかひにしるへからす』
後年追注付
ある好土安芸国にまかれりけるに宿所よりたちいてたりけるにいはたまきのおりゐてなきけるを女のありけるか見て(8ウ)いな

おほせとりよといひけるをきよてなとこの鳥をいなおほせとりとはいふそととひければこの鳥きたりなく時田より稲をおひて家／＼にはこひをけは申也といひけり国／＼田舎の人はかやうの事をやす／＼といひいたすおかしくきこゆこの事きよて後安芸国にかよふ人にとへはみなおなしさまにきよたるよし申也一州一村にも当時かく申さんにとりてはひとへにをしていはんよりはもちゐるへし但可依人々所存(9オ)

秋はきにうらひれをればあしひきの山したとよみしかのなくらん
うらひれうらふれといふ詞物おもひうれへたる心也
しなへうらふれなといふみなおなし心也
折てみはおちそしぬへき秋はきの枝もたわ／＼にをける白露
えたもたわ／＼とをふたつの説をつけたりいつれもつゆのをもくをきて枝のたわみなひけるよし也ふかき心なし

雪ふれは冬こもりせる草も木もはるにしられぬ花そさきける
冬こもりとは冬とてもこもる事なき草木も花も葉もな(9ウ)く
雪にうつもれたるを冬こもりといふ也むかしのさくやこのはなふゆこもりよりよみいたせり

すかるなく秋のはき原あさたちてたひゆく人をいつとかまたん
すかる少年の昔古今の説うけ侍し時すかるは鹿の別名也とぞ申されし
萬葉集には春なればすかるなるの／＼郭公ほと／＼いもにあはずきにけり春の／＼になるといへる鹿にかなはねはさ／＼りはちいと申めりこの哥にとりては秋のはきはらに(10オ)なかも鹿うたかひなきか

綺語抄といふ物にもわきしか又はちなとかきて待めり

あさなけにみへきよみとしたのまねは思たちぬる草まくら也

あさなけあさにけおなし事也先人説あさゆふにといふおなし心也
*庭訓

とそ侍し

後撰にはあさなけに世のうきことをしのひつゝななめせしまに年
はへにけり

万葉集にはおほくあさにけとよめるおなし心也(10ウ)

文字には朝食とかきたりいかならむ日の時にかもわきもこかも

ひきのすかたあさにけにみむいづれもこの心たかはす

人やりのみちならなくにおほかたはいきうしといひていさかへりな
む

ひとやりとは人のやるみちかは我とこそゆけはいきうしといひて

かへりなんとよめる也人やりならずといふ詞も心からする事をい

ふ也

物名すみなかし

春かすみなかしかよひちなかりせは秋くるかりはかへらさらまし

(11オ)

霞の中かよひちなかりせは秋の雁かへらさらましとはよめりしも

しはれいのたらぬにそへたり郭公なかなかくさとの哥の心を汝かし

かよひち也いふはあしく了見たるひか事也

いさよめに時まつまにそひはへぬる心はせをは人にみえつゝ

いさよめとはかりそめの心也万葉集まきはしらつくるそま人いさ

よめにかりほにせむとつくりけめやは

いさよめに思し物をたこのうらにさけるふちなみひよ(11ウ)

へにけり又いさなみ卒尔といふ詞同心歎

いさなみに今もみてしか秋はきのしなひにあらむいもかすかたを
恋部

ほとよきすなくやさ月のあやめ草あやめもしらぬこひもするかな

あやめもしらぬとは人こふるあまりにわか心ほれ／＼しくいふか

ひなくなりてあやめもしらすなりにたりといふ也

あやめとは錦ぬひ物をはしめてかめのこうかひのから(12オ)ま

て文なき物はすくなし又あみのめこのめきぬぬのめぬいもうち

めなといひて物のいろふしみえわかれくからぬ時^{*キ}とめとの

わかれぬ事なきを心もほれめもみえぬ時はあやめもわかすし

らぬ也ゆふれのくらくなりはつるを物のあやめわかれぬほとにな

とふるき物につねにかきたる也

重代心にくかるへき哥よみ又作本文する物なともこれをわきまへ

ぬも侍にや昔の人なまころまてはつねにかやうにいふ事はみなあ

まねくしりたるをちかきよりにかくやすき事を(12ウ)もならば

てあたらしくよろつる事をつくりいたすほどに不分別侍也

たちかへりあはれと思よそにても人に心をよきつしら浪

この哥の心よそのおもひにてさそとたにしられぬ事をなけくとを

しかへしおもへはそれもあはれにおほゆさるへきちきりありてや

なと思ひれたるよしにや人に心をおきつしらなみとは心をかけた

るといふ也この集のおくになと世中の玉たすきなるといへるも中

／＼にかけたるをくるしとよめる(13オ)

ゆふくれの雲のはたてに物ぞ思あまつそらなる人をこふ(13ウ)

雲の旗手とは目のいりぬる山にひかりのすち／＼たちのほりたる

よしに見ゆるくものはたての手にもにたるをいふ也又蜘蛛の手のよ

しにかきたる物もあれとあまつそらなるなとよめるうた雲ならて

うたかふへきことなし 重之蜘蛛とよみたるも雲のはたてなれと
蜘蛛によそへよまむなかるへき事にあらす(13ウ)

わかそのゝ梅のほつえにうくひすのねになきぬへきこひもするかな
ほつえとかきてそはほつえとつけたる本にてほつえはつえおな
しこと梅のすゑの枝なり又ほつえつほめる枝をいふといふ説もあ
りと申されき万葉集に柳にもほつえとよみたりそれもおなしこと
歟十二月によめる哥也

いて我を人なとかめそおほ舟のゆたのたゆ^たに物思ころそ

万葉集わか心ゆたのたゆたにうきぬなへにもおきにもよりやか
ねましこの哥の心もうきぬなは浪にゆられて(14才)たゆたふ心
ときこゆ或は舟にいる水をかく手のたゆきといふ説あれとそれは
もちゐすたゝとかくたゆたひて物思よしとそきゝ侍し

あは雪のたまればかてにくたけつゝわか物思ひのしけきころ哉

かてにとはたまればかつゝくたけつゝといふ心也雪のたまるを
みればかつゝほろゝとをつるをくたけつゝとはいふ也
よるへなみ身をこそとをくへたてつれ心はきみかゝけとなりなき
よるへとはたとへはたちよりのむ縁などあるあたりをいふ也

(14ウ) 無縁にさしはなれたるをよるへなしとはいふ也この事た
ゝよるへといふ詞にて哥にもよみ詞にもかけは昔の人はいうたかひ
思事なくいひつたへたるをちかき世に物のよししらすふるき事を
みさたらぬものゝ源氏物語に賀茂祭日よるへの水とよみたるは社
頭賀茂政平に神水とて瓶にいれたる水也なと自由にいひいてたるはいたつ

ら事もおなし物語のかたはらの巻ゝをたにみさりけるいふかひ
なき事也後撰哥滋幹少将なるとよりさしはないたされし舟よりも我そ

よるへも(15才) なき心ちせし かすならぬ身はウツクサ蕨となりなゝん
つれなき人によるへしられし

おほかたはわか名も湊こぎいてなん世をうみへたにみるめすくなし
此哥をはたゝわか名もみなとこぎいてなむ世をうみへたにみるめ
すくなしとよみてなにと申さるゝ事なかりしかは海の辺たにみる
めすくなければみなどへこぎいてなんとよめると思て侍き顯昭法
師後撰のおきつたまもをかつく身にしてといふ哥を了見してうみ
へたにと申けることほりとなひ(15ウ) てさとりいたして侍けり
されとうたならぬ詞にもへたといふ事つかはまうければ猶うみへ
たりとて侍なんや但万葉集第十二あは海のへたは人しるおきつ浪
きみをゝきてはしる人もなし

これも海のへたとはきこえたり
(頭書) 清輔朝臣奥義作書出此哥不釈後入皆うみへたと存歟

梓弓ひきのゝつゝらす多つひにわか思ふ人に事のしけゝむ
此哥の心たとへはおもふ中のいかなる事かいてこむとあやふみ思
ひしにすゑつゐにこの人に事のしけゝむとはよからぬ口舌いてぎ
にたりといふ心也事しけしとは諍論口舌をいひ(16才) ならはし

たり万葉集。人事をしけみこちたみ老か世但馬女にいまたわたらぬあざ
河わたる後撰事しけしゝはしはたてれよゐのまにをけらんつゆは
いてゝはらはんすゑつひとはすゑになりてつゐにおもふもしるく
事いてきぬといふ也万葉十一玉の緒をくゝりよせつゝ未遂にゆき
はわかれすおなしをにあらん のちつゐににもにあはむとあざつ
ゆのいのちはいけりこひはしけれと 我ゆへにいたくなわひそ後
遂にあはしと思し我ならなくに たかまとのぬへはふくすの末つ

るにちよにわすれんわかおほきみかも(16ウ) のちつゐすゑつ

ゐたゝおなし事也この心にてこそ返しの夏引の手ひきのいとをくりかへし事しげくともたえむと思ふな

このうたもかなひてきこゆれ末の字はのちとよむ字也

暁のしきのはねかきもゝはかききみかこぬよはわれそかすかく

此事は和哥論義といふ物にくはしくかきたりいまひとつの哥

暁のしきのはしかきもゝよかききみかこぬよは我そかすかく

やうに昔よりふたつの説ある事はたゝふたつなからかれもこれも

もちゐるへき也とぞ申されし(17オ)

院殿上哥合に先人 思きやしちのはしかきゝつめてもゝ夜もお

なしまるねせんとはとよまれたるを時の人ゝ事のほかかにほまれ

あるやうに申けるをそねみ思ふともからしきのはねかきのうたを

すてゝしちのはしかきにつくかといふ事を申けるとのちにきゝ侍

しもとよりこの哥をしちのはしかきにてこそあれといひなすには

あらずふたつある古哥なればひとつにつきてよまれたる也 すみ

わひぬ今は限と山里に身をかくすへきやともとめてんかたはらに

つま(17ウ)木こるへきとつけたり先人そのかみ すみわひて身を

かくすへき山里にあたりくまなきよはの月哉この哥あまねく人の

くちに申き老のゝち 今はとてつま木こるへきやとの松ちよをは

君と猶いのる哉 これ又勅撰にのせられ侍にきこれをもかれをも

ひとつにつくには侍らす

今しはとわひにし物をさゝかかの衣にかゝり我をたのむる

いましはとは春部に誰しかもの詞のことし今はと思きほもわひに

しものをさゝかかの又人をまつへきやうに(18オ)我をたのむると

いふよし也万葉集第四 今しはよ名のおしげくも我はなしいもによ

りてはちへになつとも 今はといふへきをいましとよめる証哥也

今しはしといふ心にはあらず

*あはれともうしとも物を思時などかなみたのいとなかるらん

いとなかるらんはいとまなかるらんといへる也最流といふは僻案

の了見也惣此集之中最字イいとゝよめる事不可用之

水の面にしつくと花の色さやかにもきみかみかけのおもほゆる哉(18ウ)

しつくといふ詞しつむといはゝしつむにあらす沈はそこへいりひ

たるも又水に在る也 しつくと水にあらはれれとも水に入は

てす又水のしたなる石と浪よりいつるやうなれとあらはれもはて

すかくれもはてぬやうなるをいふ也万葉 藤波の影なる海のそこ

きよみしつくと石をも玉とそわかみる あしひきの山のもみちに

つくあひてちらん山ちをきみかこえまく 催馬楽 かつら木のて

らのまへなるや』とよらのてらのにしなるや』えのはるにしらたま

しつくとや□しらたましつくとや(19オ) 哥の心は池の水に花の枝

のすゝかれてしつとくいろのさやかなるやうにきみのみかけのおも

ほゆるとよめる也

色もかも昔のこさにゝほへともうへけむ人のかけそこひしき

此哥させる説あるへきさまにもあらずたゝかきうつす人のしとけ

なくてむかしのこさをむかしのこさすとかきたるにつきてよみ

にくゝくせはみたることこのむものゝいたつら事を尺しつるそ

のことゝなきひし也

玉たれのこかめやいつらこよるきのいその浪わけをきにいてにけり

(19ウ)

玉たれのかめをなかにきてといふこと風俗のうたとかやかめの

・またれはかめに玉のたれたるかたあるをいふなとあまたかきた

り哥にはたまたれとてかめによみつゝけたる事この哥のほかにな

したまたれのみす＊このみよめり。風俗の哥につきてよめるにこそ
鉤といはんとてよめるにてありなん申されしかとそれも勢態也イ

老ぬれはさらぬわかれのありといへはいよ／＼みま／＼ほしききみかな
さらぬわかれは不去別也のかれぬよし也むけに心えぬ人はさらぬ
わかれとよみなしき(20才)

おいぬとてなとかわか身をせめきけんをいすはけふにあはまし物か
なとかわか身をせめきけんとは責来けんとは歎怨つる＊なきこしう
らみこしなといふおなし心也イモカキニカセウツクナリトイ
の常様の詩に兄弟閨手牆外御其務＊とイ閨の字をよめ
りといふ心はしひてたかふましけれとこの詞つねに哥などによみ
ならへる事ならねは責来けんにてありなむ

さゝの葉にふりつむ雪の末をもみもくとくたちゆくわかさかりはも
くたつとは雪のをもれば本のかたふきくたる也万葉(20才) よく
たちねさめてをれば河せとめ心もしのになくちとりかも 夜く
たちでなく河千鳥むへしこそむかしの人のしひきにけれ かや
うにつかひたる詞也

しりにけんきよてもいとへ世中は浪のさはきに風そしくめる
風そしくめる後撰哥にも白露に風のふきしく秋の野はつらぬきと
めぬ玉そちりけるともよめりしきりにふく風をふきしくとも風そ
しくめるともいふ也

世中のうけくに秋ぬおく山のこのはにふれるゆきやけなまし(21才)
うけくは世中のうきといふおなし事也山した風のさむけくにもさ
むきよし也この葉にふれる雪によそへておく山へ行やきえなまし
とよめる也

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわか身はなりぬへら也
はしにわか身とはしにたりぬるよし也内親王の身おもひのほ

かに入内をして又そのほゑあるさまにもなかりければ木にもあら
ず草にもあらずはしたなる身とよみたまへる也はしたにわか身を
かきたる物もありはしもお(21ウ)なし心也

世中はいつれかさしてわかならんゆきとまるをそやとよさたむる
相坂の嵐のかせはさむけれとゆく多しらねはわひつゝそぬる

風のうへにありかさためぬちりの身はゆく多もしらすなりぬへら也
此三首哥は蟬丸かよめるを古今には作者をあらはさず後撰には作
者をかける也とそ基金吾申されし古今さつけられける時の物語の
内なれば指事ならねと書付之

長哥(22才)
かくなはに思みたれてふる雪のけなはけぬへくおもへともえふの身
なれば猶やます

金吾申されけるは閻浮の身なればをえふとかきたる也とそ侍け
る閻浮とは人界の身なればおもはしとおもへともかなはずといふ
よし也これもよのつねなる詞にもあらねとつたへたるやうありて
こそは申されけぬ猶勢駢イなれとならひつたへたる説なれば注付之
これをおもへはけたものゝ雲にほえけん心ちして(22ウ)＊

忠峰集にはこれをおもへはいにしへのくすりけかせるなけたもの
ゝかくてはいますこしことほりきこゆこれは淮南王劉安か仙薬
を服して仙にのほりける時そのくすりをなめたりし鶏犬みな仙に
なりて雲のうへにほえたりといふ事也

年のかすさへやよくれば
金吾説としのかすさへいやよきればといふ也いよ／＼すくれはと
いふ也弥過也とありしかと猶おほつかなしとそ侍し(23才)

旋頭哥

春のへにまされはその・・・つさくみれとあかぬ花まひなしにたゝなるへき花のななれや

花まひなしとは花もいひなしにたゝなるへき花の名なれや花も

いひなしにてこそあれやすらかにいかゝなるらむといへる也

哥とをかけるやうきみてへはをいへは也 けなはけぬへくきえなは

きえぬへき也物にさりける 物にそありける かやうに・花も

いひなしを 花まひなしにとかける也 (23ウ)

こよるきのいそたちならしいそなつむめさしぬらすなおきにをれ浪

めさし一説あまのいざりすとて物の根なる物也一説海草なとるめのわらへなり

れはめさしといふ・・・也 竹河哥に竹河のはしのつめなる・

・のつめなるや花そのに我をはゝなてやわれをはゝなてやめさし

たくへてめのわらはへといふもさもありぬへくや

かひかねをさやにもみしかけゝれなくよこほりふせるさやの中山

けゝれなくとは心なくといふ也よこほり四郡にふせるといふ (24

オ) 説あれとその山さやのこほりにありといへは四郡にあらざる

にやよこほりくやるとかきたる本もありくやるもふせるもおなし

き詞といふ 貫之日記に かくてさしのほる河尻よりのほる也に東の方に山のよこ

ほれるをみて人にとへはやはたの宮といふ古今撰者山のよこほれ

るをみてとかけるよこほりふせるといふ哥にかなふへくや

序詞之中

まくら詞春の花にほひすくなくして (24ウ)

金吾説とてまくらとはわれらといふ詞也と申されき而の字をまくらといふ

とそ侍し老後管見而の字を汝とはふみにおほくよめりわか身の事

につかへる事は見をよはす漢高祖そわか身を而シヨウ公となりのたまへ

る事・つねにあれば公字つゝきたればとこれにやおもひよそふへ

からん

而字唐韻には乃也豈也自端之詞也頰毛也

玉篇人之切語助也能也又頰之毛也

物名部

木の名つゝきにかきならへたればうたかひなき木の名とみゆされ

とちかき世にざる木ありといふ人なし古哥とて

おく山にたつをたまきのゆふたすきかけておもはぬ時のまそなき

物語かゝるイセイに谷ふかくたつをたま木は我なれやおもふおもひのくちて

やみぬる 此物語前巻院祿子内親王宣旨つくるなるとき昔の女哥

よみはみな比イこの才人よりはふるき事もならひし事なればやうやあ

りけんつたへねはしらす (25ウ)

めとにけつり花させりける

著めとゝいふ物の名也草類也右近馬場のひをりの日騎射の手結に

とねりかとものまさしく裾をひきおりにきたるをひをりといはむた

かはすきこゆイ・荒手結にもおなしすかたなれとあらてつかひはかちの

やうにてまてつかひをむねとしたればこの事あたりてきこゆ

人名 龍

おほくうつくといひけりとかきて説たともきこゆれと金吾た龍とよ

まれければ其説をうけたりざるは堀川右大臣うつくと (26オ) よま

れけりとかきたる物あめれと金吾まさしくちようと申されけりあか

たみにはえいてたゝしや

あかたはのなかをいふなり外官除目をあかためしといふこのゆへなり(26ウ)

後撰

ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおとろかれぬる

ふる雪のみのしろ衣とつゝけたる雪のふれはみのをきるへきかはりにしろきうちきをきて春きにけりとおとろかるとよめるか万葉集にはみのしろ衣といふ事みえざるにや此集にみのしろ衣ぬはずともきよとよめる中原宗興此哥の(27オ)後によめるとみゆ又古哥とてせなかつためみのしろ衣うつ時そ空ゆくかりのねもまかひけるといへる哥のさまもふるくはみえず遠人のためにみのしろ衣とよめるにや蘇武耿恭などを思へる哥なれば上古の哥とはみえず

きてみへき人もあらしな我宿の梅のはつ花おりつくしてん

きてみへききてみるへきといふ也(27ウ)

春の池のたまもにあそふにほとりのあしのいとなき恋もするかな

玉藻に遊にほとりのあしのいとまなきといふ心なり

山もりはいはゝいはなむたかさこのおのへの桜おりてかささむ

高砂播磨の名所なれとすへて山をはたかさこといふひとつの説

也此哥ひらの山にてよめるといふおのへとはおのうへといふなり(28オ)

梅花ちるてふなへに春雨のふりてつゝなく鶯のこゑ

紅のふりいてつゝとおほくよめる哥をは紅に布をそめてふりいてといふ物をよむと積する物あなれとなにもものゝこゑしらへあけてきこゆるをふりいてゝといひならへるとそきこゆるうち

いつる声はすゝ虫ならねとふりいつる様にきこゆるゆへ也

いもか家のはひいりにたてる青柳に今やなくらん鶯のこゑ(28ウ)

はひいりにたてる門のいりくちをよめるなときこゆ

竹ちかくよとこねはせし鶯のなく声きけはあさのせられず

よとこねよるふすとこあらはにきこえたりふるき哥はたゝあり

によめればか様の事おほかり

時わかすふれる雪かとみるまてにかきねもたはにさける卯花

かきねもたはに古今枝もたはゝとよめる(29オ)おなし心なり

行かへるやそうち人のたまかつらかけてそたのむあふひてふ名を

やそうち人とは八十氏人とかけり世にあるおほくの人といふ心

なりふるくはかくよめるをこれにつきて宇治川をやそうち河と

よむと又つきて近代宇治の里人をやそうち人とよめる哥おほかり(29ウ)

こよひかくなむる袖のつゆけきは月の霜をや秋とみつらん

これは月の霜をかきたかへたる字の誤によりて月の笠と尺したる

也僻事也月照平沙夏夜霜といふ心をよめる也

けふよりはあまのかはらはなゝんそよみにもなかつたゝわたりなん

愚本にはそこゐともなくといふ説をもちあきそよみとそれは水ともなくわたらんといふ心といふ但老後行成大納言筆をそよみとか

ゝれたればその説につくへし

秋くれは野もせに虫のをりみたるこゑのあやをはたれかきるらん

秋くれは野もせ庭もせ水もせ国もせこれもな野面に満てあま(30オ)ねぎよしの詞也のあやとははたをる声のきこゆればは綾をは

たれかきるとよめる也あやとは綾也あやしといふ心とはならはす

山かせのふぎのまにゝもみちはゝここのもかものちりぬへら也

ふきのまに／＼とはたふくまうにといふおなし心也すへてまに
／＼とは随意とかきてまに／＼とよむ也君かまに／＼神のまに
御こころにまかすいふよし也このもかのもとはこの面かの面也よにもちる
心也。そよめりといふ事あれといつらにもあるへき事也金吾判・
・・・まては・・・れたるをはゝかりてかの門弟等好読
ひくらしの声もいとなくきこゆるは秋ゆふくれになればなりけり

(30ウ)

いとなく春部玉藻に遊同心なり

おほそらにわか袖ひとつあらなくかなしくつゆやわきてをくらん
此哥不審なしわかそてひとつかきたる本を見て袖ひとつ心を書たる
は字誤也

あられふるみ山の里のわひしきはきてたわやすく。人そなき

たわやすくたやすくといふ詞をもしをそへていへる也

おもひ河たえずなかるゝ水のあわのうたかたひとあはてきえめや

うたかたといふ詞は真名には寧なとつかへる詞のやうにおもひよ

る事かはさなくてはいかてかといふもしの詞也それを此(31オ)

『よる事かはさなくてはいかてかといふもしの詞』・哥ひとつを

みてうきたる人にいふよしにうたかた人と六字つゝけてよめりと

いふ説はふかく見わけてしりかほはかりのへやる謬説也人につ

ゝけてはいはすたゝ四字の詞也 万葉集十五イうくひすのきなく山ふ

*はなれそにたてるむろの木うたかたもひさしきとしをすきにけるかな

きうたかたもきみか手ふれぬ花ちらいさしめやも 源氏物語 かきたれ

てのとけきころのはるさめにふるさと人をいかにいとゝしかにいのふや つれ

／＼にそへてもうらめしう思いてらるゝ事おほほ侍をいかてかは

きこゆへからんとある御返

なかめするのきのしづくに袖ぬれてうたかたひとをしのはざらめ
や(31ウ) ほとふるほとはけにつれ／＼もまさり侍けりあなか

しことあや／＼しくかきなしたまへり・父の御返事あなかしこ

とるや／＼・なきむ哥をうたかた人うきたるよしならは便な

くそほ・いかにてか人をしのはざらんといふよしの詞也伊勢も

まかる所しらせす侍けるころ又あひしりて侍けるおとこのもと

より日ころたつねわひて・せにたると・いへりければそ

の返事よめるうた六字をつゝけては心さらになはす四字の

詞にてかなふ也

ゆきやらぬゆめちにまふたもとはあまつそらなきつゆやをきけ

る(32オ)

夢の内なればあまつそらなきつゆやをくとよめり

かすかのゝとふひのゝもりみし物をなきなといはゝつみもこそすれ

とふひのゝもり古今哥若菜イにあり

あふ事はとを山すりのかり衣きてはかひなきねをのみそなく

きぬなどのすりにはおほくとを山をすれる物なればよめるにこそ

一本には遠山鳥とありねをのみそなくといふイにことよれるにやすりの

とを山いはれあるうへに大納言の本にとを山すりとあり

なにはかたかりつむあしのよのなかにひとへもきみにわれやへたつ

る(32ウ)

あしつゝはあしのよのなかにうすやうのやうなる物也それほとも

へたてすといふよし也

おるからにわかにはちぬをみなへしいきおなしくははる／＼にみむ

一説には花ことにみむとあり心はおなし心也

ふかくのみたのむ心はあしのねのわけても人にあはんとぞ思

あしのねみたれあひたる物をわけてもとは思心のあなかなれは
わけたつねでもといふ也

くれはとりあやにこひしくありしかはふたむら山もこえすなりにき
くれはとりは綾の名也あやにこひしくはあやにくにこひし(33
オ)かりしかはとをきみちもゆかすなりにきとてふたむらをくり
ける綾にそへたり

誰となくかゝるおほみにふかゝらん色ときはにいかゝたのまん
おほみとは新嘗祭ト合の人は小忌をきるうらにあはぬイさなき人の例の束帯した
るをその夜はオホホミ大忌の公卿といふ也

つのにのなにはたゞまくおしみこそすくもたく火のしたにこかる
れ

すくもたく火浦にすむあまなどはもくつをかきあつめてたけはし
たにこかるとよめり

わかやとゝたのむよしのにきみもいらはおなしかさしをさしこそは
せめ(33ウ)

たのむよしとは山のまに／＼かくななんといふふる世の心をイ山のあなたにやともか
なといふなるうたの心を世のうければよしのにかくなむとおも
ふ所にきみもいらはかさしとは山にいる人しはなとかりてマヘニぬたるイ
タテ、鹿にみえしとかまふる事をおなしかさしをももるともにさ
してむとよめる也

ひきまゆのかくふたこもりせまほしみくはこきたれてなくをみせはや
ふたこもりはおなしまゆにかひこのふたつこもりたるをいふ桑を
こくによそへてこきたれてなくとよめる

はち才葉のうへはつれなきうらにこそものあらかひはつくといふな
れ(34オ)

此哥をはすなはとかきてそれを釈したる人あり家本にはなにこと

もおろかにやすき説ことをもみればイにつきはちす葉とかきたり運は池にあれば
かひつくへき物ならずとてはすなはにかひをつくるもいはれある
*かいつくはすなははうらある物にあらすうへはつれなきうらにこそと
へけれど。二句までよみすへたる哥をうらおもてなき物といはむ
こと哥の本意なくや池の運にも水の中にはかひにゝたる物もあり
うへつれなくうらある物やかなふへからん大納言もはちすはとか
ゝれたり

伊勢の海のあまのまてかたいとまなみなからへにける身をそうらむ
る(34ウ)

此哥先人命云往年参崇徳院之次以女房給草子一帖彼仰云此抄物或
好士称秘藏物所持也乍坐加一見即可返上物躰可然哉所存如何依仰
於御簾前披見之間不及委細即返上申云古来書出如此物之時雖先賢
皆少々事誤難通事候イ歎此抄物大概優候但此中伊勢の海のあまのまて
かたいとまなみと云て不勘付此哥事如此候イなるを見付て海人等
そきてこれを取候候イなるを暇なしと詠する由基俊申候と申件抄
物其時不知誰人所進清輔朝臣初出任(35オ)不経幾程手跡未見知
即返上訖後経多年此抄号奥義集進二条院之時候イまてかたの釈所書加
也彼時申旨和覧者相語作者之間結意題書此事云、其始書此抄物之
時惣字誤多候イ後撰イ見て書僻事也清輔朝臣候イ和哥勤字博覧異他
注未勘由以往年未勘後日注出非伝授之由分明也者庭訓如此候イ本候イ哥躰又尤優也然而父卿疎遠若伝父祖之説者最初可書出時沙之子細
以後年勘加非伝受由分明歌庭訓如此大納言本又まて分明也

しつはたにへつるほど也しらいとのたえぬる身をはおもはざらん
しつはたとみたれたるよしをいふ也思みたれつるほとなり(35

ウ)といふ也

本定
この月をまさぎのつなによりかけてあかすわかるゝ人をつなかわ

まさぎの綱とはまさぎのかつらを綱になひてそま木をひくくなる事にそへたり 老後乗船之次聞罷取男言語あのみま木の綱くりこせいふ哥思問之答云山の崎に舟を繫綱と申也 雖非此哥事依聞及注之

限なきおもひのつなのなくはこそまさぎのかつらよりもなやまめ

おもひのつな思緒愁緒別緒心緒などいふ事の心歎

「おきなさひ人のとかめそかり衣けふばかりとそたつもなくなる(36才)

おきなさひは老て猶されすけるよし也七十の中納言猶たかかひの

・ ・ ・ 思てよまれたる哥也たもとにつるをぬひたり

はちすのはひにそ人に思らん世にはこひちの中におひつゝ

これは蓮のはひといふ物也

あけてたになにゝかはせむみつの江のうらしまのこを思やりつゝ

うらしまの子万葉集より事ふりたればかゝす

おもひきや君か衣をぬきかへてこき紫の色をきむとは

こき紫とは三位袍をいふ也袍は一位より三位まで同色四位紫五位

緋六位。六位叙五位時着五位藏人袍。叙四位時(36ウ)着貫首袍四位

叙三位時着大臣袍也庶明卿明參議正四位下左大弁天曆五年二月任權

中納言叙從三位于時九条殿右大臣右大將袍をつかはしける哥也今

の世に四位右近ひとへに公卿におなじくしてける也ちかき世まで資房

卿記いにしへもちきりてけりなうちはふきとひたちぬへしあまのは衣

飛たちぬへしとは任納言悦喜自愛のよし也させる子細なきことを不得して其事となき除名人なと疑たるいたつら事也河社にそら事おひたる賦也

みこしをかいくその世に年をへてけふのみゆきをまちてみつらん

北野にみこしをかといふ岡ありけり 延喜十七年閏(37才)十月

十七日行幸北野于時枇杷大臣中納言春宮大夫左兵衛督又字誤にみ

こしをかにてをみこしをかきてとかきたるとかきたるに愚短の不事となき事也このころのおきな人神社行幸にきゝならひて北野大原野を神社のゆへと思はひか事也むかしはたかゝり御覽せむために野の行幸ある也延喜御時きたのにも大原野にも行幸ある也

うつろはぬ心のふかく有ければこゝらちる花はるにあへること

此哥たれも心えわきたる人なきにやこゝらちる花世人の(37ウ)

ものいひなとみたれたりとにや又うつはてのとかに春にあへりと

にや心えず

なをき木にまかれる枝もある物をけをふきゝすをいふかわりなき

高津のみこの述懐吹毛求疵之由也

今こんといひしはかりを命にてまつにけぬへしさくさめのとし

さくさめの刀自諸人一同説しうとめのなのよし金吾も被申けれ

はさてこそはあらめ但讚岐入道綱朝臣説とてつたへ(38才)

たる異説也

さくさめの年といふ早蕨早苗の早字わか草はつ草の草末通女た

をやめはつせめかうちめのめわか草めの年にて待にきえぬへし

とよめるかしうとめ平懐の事ならば詞にあとうかたりの心をと

りてかくへしとおほえずすこしつねになき事なればやあとうか

たりとはいふへきあとうかた(38ウ)りとはなそゝかたりと

いふ事か拾遺にはなそゝかたりとかきたり

そむかれぬ松のちとせの程よりもとゝとたにしたはれせし

ともゝはともゝといふ心か古今哥にもありそむかれぬと

いふ心もおほつかなし此哥中ゝに難義ともいはねと師説もな

し了見もをよはず(39才)(39ウ)

『物いひなとみたれたりにや又うつろはて・かにはるにあへり

とにや心えず』

此集の作者おほつふね清輔朝臣の本にはおほつ少将とかきたり家本にはおほつふね也敦忠中納言の。娘中納言おさなくてよひつけれたりける名をやかてかくかきたりといふもまことにむけにうちとけ事也名なくは棟梁かむすめともかくへけれと 勅撰作者にかくてのせたれはよくきたまりにける名ときこゆ大納言の本にもおほつふねとあり 富少将これを家本には藤原敦敏とかきて少将(40才)敦敏哥と被申き佐国目録にも富少将とかきたりし僻事とみしかと大納言本にも『かくかゝれたれはたゞふるからむ説にこそつかめ』すへて此集詞も作者もおほやけことゞもみえず最初の草案とみゆるいかなりける事にか 大納言筆に随事謙徳公藏人少将之時集えらふ事を奉行の人なれば彼家々嫡文書つたへられたれは定て証本と信仰す

拾遺(40ウ)

うちきらし雪はふりつゝしかすかにわか家のそのにうくひすそなくうちきらしとはそれのかきくらすをいふしかすかはさすかにといふおなし詞也棚霧合 天霧之。同心也

春の野にあさるきゝすのつまこひにをのかありかを人にしれつゝあさるとは草の中などに物をもとむる心也しれつゝしられつゝ也さくらかり雨はふりきぬおなくはぬるとも花のかげにかくれんさくらかりさま／＼の説きこゆさとくらかりあとくらかりさくらかもとへゆきなとをの／＼かきたれと愚説たゞ物をもとめたつぬるをはむらさきかりたけかりともいふ花をたつぬるにて侍へし(41才)

秋たちていくかもあらぬにこのねぬるあさけの風はたもとすゞしも

あさけといふ事ふたつありひとつはあさけゆふけとて朝夕の食事をいふこれはあさあけの風也とふるくよりいへるをあさあけとかきて五文字七文字にこのあ文字をくはへよむ事はちかくよりそきこゆる万葉集にはをのつからあれと三代集にはみえず万葉集にも郭公けさのあさけになきつるはきみきくらんかあさいやすらんけさのあさけかりかねさむくきくなへのあさちはいろつきにけり このころのあさけにきけはあしひきの山をともよましさをしこそなく(41ウ) うちまかせてはあさけとかくへきにやあさあけの五文字によまんこいかにや

あしひきの山ちもしらすしらかしの枝にも葉にも雪のふれゝは

至愚説にはたゞ山をばあしひきそらをはひさかたとよむとはかりにて凶日來足を引膝の形などいふ事はしらす(42才) 枝にも葉にも雪ふれば山ちもしらすとはよめる也その本うへの事しらす

物名部 かくしたる物の名も哥のさまもみくるしけなる事哥のさまおほかりもとめいたるをましくや

わすれにし人のさらにもまたるゝかむけにこしとは思ものから無下にといふ詞哥によまねと隠題のならひなれは。たゞの哥にはよむへからす月のきぬのうたにはよむへからすひさかたの月のきぬをはきたれともひかりはそはぬわか身なりけり(42ウ)

此哥おほかたえ心えず

鹿皮のむかはき

かのかはむかはきすきてふかゝらはわたらてたゝに帰はかりそ

むかはきとは肝のむかひすねと凡人のむかひすねといふ事をよめるにや此哥ともすへて不尋常

午未申酉戌亥

むまれよりひつしつくれば山にさるとりひともいぬるに人あていませ

此哥第二句さらによみとかすもし積し造れはとにやつゝきてもき

こえず

かのをかに萩かるをのこなはをなみねるやねりそのくたけてそ思

(43オ)

ねるやねりそとはなにを申すにかとたつね申しかはかく問はさる

哥よまむと思ふかとゝかめられ侍き萩かる物のゆふへき縄のなけ

れはかれたる枝をねちよりてゆはむとするよしかこの哥まねひよ

むへからすとそ待し本集いこしていにし年ねこしてうへしわかやとのわか木の梅は花さきにけり

ねこしてうへしほりうへたるよしとそいふめる

かのみゆる池辺にたてるそかきくのしけみさえたのいるのでこえさライ

此哥まゝの釈おなしく承和菊黄菊ひともときくなくはしくかき

ためりそもく大宝よりこのかた聖代治世に(43ウ)このみたまへ

る物おほかれとなと天平延暦弘仁といふ物はなくてはくたれる世の

承和しも菊の名にはつきけるにか不審あるへくや万葉集にそかと

つかへる詞おなし心おほくみゆ

そかのむらとりそかひにみゆる竹そかなとすへてをひすかひなる

ことをそかといへりかのみゆるといへるに池のむかひときこゆ境

にうへたるすかひ菊のいるのてりこくみゆるとあらはにきこゆる

いかゝきしかみとかかなしたりとも心はおなしことにやふるきう

たにもことはにも貫之をはしめてよみあ(44オ)つめたるよるへ

の源氏の巻ごとにつかへる詞をたにかたはらをはみす瓶の水帯

のかこなといひなさるれば承和もいかゝ侍らん

我のみやこもたるてへはたかさこのおのへにたてる松はこもたりもイ

此哥さらに心えず人にもとはすもしおのへの松のあたりこもイに小松の

おいたる心にや

往年治承之比古今後撰兩集受庭訓之口伝年序已久雖恐忽忘先達

古賢之所注後代之所見(44ウ)猶非其失況依恥管見謬說故不敢

紙筆今迫耄及之期顧余喘之尽至于愚老之没後為散遺訓之蒙昧最

要密々所染筆也更莫令他見

權中納言定家卿(別筆添紙)
戸部尚書判(45オ)

万葉六

玉しきてまたましよりは竹そかにきたるこよひしたのもくおもほゆ

十四つくはねにそかひにみゆるあしほ山あしかるとかもさねみえなくに

十七朝日さしそかひにみゆる

十九こゝにしてそかひにみゆる

二十みことかしこみおほのうらをそかひに見つゝみやこへのこる

追注付三代集無之

かはやしろ

亡父所詠哥 頭中將資盛朝臣哥合

題五月雨 (45ウ) 一番

左 左大將

五月雨にむつたのよとのかは柳うれこすなみやたきのしらいと

右 入道釈*

さみたれは雲まもなきをかはやしろいかに衣をしのにほすらむ

判入道

右哥この河社の事人たしかに申さざることなるへし或は夏神楽と云

事也とも申ためるを此哥にとりては夏神とはみえず但これ愚老所詠

に侍けり定て(46才)ひかことにも侍らむ又おもふ所あるにもや侍

らむたとひこの事いかにても河柳哥かつに侍へし

左大將家六百番哥合

題 寄衣恋

左 頭昭

恋ころもいつかひるへき河やしろしるしも浪にいとむしほれて

右 家隆

いかて猶よはの衣をかへしてもかさねし程の夢をたにみむ

右方申云し*のにおりはへといふ本哥いかに了見してよみたるに

か陳云これは夏かくらといふ事なり(46ウ)そのかくらにはき

よき川にさか木をたてしのを棚にかきて神供をそなふ是を河社

といふなり夏かくらの譜にみえたり件神楽祈禱のためにする事

也されはなき事おいてしけるをぬれきぬの心によめるにやそれ

を恋衣のひぬに思よせたるなり左申云右方無指事*

判入道

左恋衣を河社によせてよめりおほつかなくみえ侍程に左右難陳の詞

こそめつらしくみえ侍めれ此事の本哥二首はともに貫之集よりい

たり(47才)

云 河社しのにおりはへほす衣いかにほせはかなぬかひさらむ

又云 ゆく水のうへにはへる河社かはなみたかくあそふなるかな

これは天曆御時御屏風月次の哥也しかるを俊頼朝臣かきたる物には

此河社の事しれる人なしたむしはかりなるへし人の申は水のうへ

に社をいはひて夏はかくらをするなりつきの哥にてはさも心えつへ

し始の哥は神楽のよしもいはすおもひかけぬ衣をほしてひさしくひ

ぬよしをいへりかくらにはかなはずとかきて侍めり 又此事かくら

つたへたる家の人に尋侍しも夏かくらといふ事あるよし申つたへた

るへしされと譜など分明にみえ(47ウ)たる事なしとそ答し侍し又

俊頼も筆築ふきなり神楽の事さためてしりて侍けんを其比まてはま

つしれる人なしと書て侍めるをこの陳状には夏かくらの譜にみえた

りと申きりて侍めり尤其証拠勘申へき事也もし以今案申さは道のた

め極て可有恐事也但聊了見仕たる事の侍は此申状に已勿論に侍へし

先河社をよして夏神楽といふ事夏も神楽をせん事かたかるへからす

但河社のまへにて夏神楽をしけるなるへし彼河社しのにといへるは

しけく常なといへるふるき詞なり万葉集などにもよみつかひて侍め

り(48才)おりはへといふ又おなし事也ほす衣なぬかひすといへるは

ひさしくひぬことをいはむたためなぬかとも八日とも云又哥のならひ

なり衣といふはまことの衣にはあらずきぬをほしたるにたる事を

いへるなりいはゆる龍門のたきを伊勢かなに山ひめの布さらすらん

といひ布引のたきなといふ様なる事也しかるを今夏神楽のふといへ

るはかつは俊頼朝臣のかきたるおもむきにもつき又しのといふ詞に

つきて篠を棚にかきて神供を弁備するなりといひ衣はぬれきぬの心

なりなといへりまことにめつらしくいつれの神楽の家よりつたへた

るにか侍らむ(48ウ)定其証拠たしかに侍らん尤めし御覽あるへき事なるへし但今恋衣を河社にいのるよしを始めてよみてしるしも浪にと詠せるこそ遺恨に侍めれ右哥はよはのころも返してもといへるうちまかせたる事也慥なる証拠をうけたまはらざらん程は以右勝とすへし諸社に百首哥よみてたてまつりし時五月雨哥賀茂社五月雨はいはなみあらふきふねかは河社とはこれにそ有ける庭訓密々に被申合しは河社川のいはせにおちたきつをとたくしら浪みなきりて鼓などの様にきこゆる所を河社といふなり(49オ)

江帥匡房卿

河社秋をあすそとおもへはや浪のしめゆふ風のすゝしき

といへる此こゝろなり

彼貫之集二首も此心さらにたかはすや

此事作本文の不善の物共に心つけてよしなかるへし

きかすましきよし被秘申しことなり更不可口外

かひやかしたのかはつ

此事悉見六百番哥台

郭公哥二四八の事

亡父説此哥在万葉集之由雖有説已以無実也所詮(49ウ)無証拠哥也

不可用中古之虚言作出事歎云、

往年治承之比古今後撰兩集受庭訓之口伝年序已久忽雖恐忘先達古賢

所注猶非無其失況依聆管見謬説故不載紙筆今迫蓋及之期願余喘之尽

至于愚老之没後為散遺孤之蒙昧抽最要密々所染筆也莫令他見

嘉祿二年八月 戸部尚書在判(50オ)

此草注付之後拾遺相公一人之外更不令外見至于嘉治四年泰依承旧好之論言遙付鬻北之雁足

本奥書云

貞治三年三月十八日書寫之

鶴首武衛藤在判

此本不足之所在之間申出室町殿御本書加之筆

宝徳元年十月九日(50ウ)

校異

一、校異には以下の本文を用いた。

1、1丁ウく45丁オは高松宮藏有栖川宮旧藏本。国文学研究資料館の紙焼写真を利用していただいた。

2、「かはやしろ」の部分については宮内庁書陵部藏定家筆本室町期模写本。久保田淳氏『新古今歌人の研究』所載の「かはやしろ」翻刻を利用していただいた。

一、校異に当っては凡例に示した以外に、以下の方針をとった。

1、各伝本間における漢字と仮名の相違、「む」と「ん」等の表記の相違は、これを省略した。

2、校異は宝徳元年本の*部分を上部に示し、下部に校異本文を掲出した。

1ウ このみーこのみよみ 見えむーみらむ ころーころも

2オ よまさざらんーよまさらん もちあーもちある あへー(本

行) もちぬーもちぬる

2ウ いふーいふ也 一説ー又一説 『せともー』せと とりー(右傍)

3オ きこえぬにやーきこえぬにや などともーなにも

3ウ とめておりつるとはーとめておりつるとは 『を心えてをしていふ也』(消去符号ナシ) とーとそ

4オ たにもーたに うへ□ーうへに

4ウ 事ー心 ありなんーありなは

5オ 本を見つけてー本につきて 本ー手 なるはーならば

5ウ かくつーかくす なかむーなかる ともーともと

6オ い・はーむかしは あり・心はーありそれも心は

ならーナシ とこそーとてこそ みちつれたるーうちつれたる

7オ さひしきーこひしき さとムーさとに

7ウ しなしきーしなゝき わかぬーわかぬ いへりーといへり

8オ 又二首哥などいふー(右傍)又二首哥など(本行)といふ 時・のー

時物の くまなきーあかき この鳥ー(右傍)

8ウ おとへーおとろへ

9オ よしーよしを 一州一村にも当時かくー(右傍)申さんにと

りてはー(左傍) へし但可依人々所存へー『くや人の心にしたか

ふへし』

10オ 雪ー霜雪 せりーしたり はーナシ

10ウ 先人説ー先人説

11ウ とはーと たらぬにーたらぬは 也ーと ひよーひとよ

12オ 恋部ーナシ

12ウ モンーアヤ

13オ いたすーいたす也 ほとにー(右傍) 不分別事侍也ー(左傍)

不分別事侍也 たるーたり よめる□ーよめる也

13ウ のーは こふ□□ーこふとて よしーやう はたてーはた

14オ たー(本行)

14ウ 雪のー雪ゆ たまるをーたまると

15オ はなれたるーはなれたる 思事ー思事も

15ウ ウキタサーナシ となひーかなひ

16オ うみへたりーうみへたに 後人ー以住人

16ウ 万葉集ー万葉 世にー世と

17オ ある事ーならへる事

17ウ そねみ思ふーそねむ

18オ あたりーあまり きはもーきりて

18ウ あはれともー不可用之ーナシ

19オ あらはれれーあらはるれ 石とー石も あらはれーあらはれ

□しらーましら

19ウ ひしー事

20オ かめの・またれーかめのたまたれ このみよめりーとのみよ

め(以下墨滅による削除)

20ウ なきこしうらみこしなといふーなきこしうらみこしなと いふーいふ

も 哥などによみー人のいひ 末をもみー末をよもみ

21オ 人とー人も

21ウ きえなましーけなまし をーと

22オ よめるーよめりける あらはさすーあらはさすりけり 基金

吾ー基金吾 しーける

- 22ウ かくなはに―かくなわに 身なれば・・を―身なればを
も―と ハウホツ―ナシ ヲホツカナーナシ
- 23オ ナ―ナシ リウ―ナシ のほりける―のほれる くれは―けれ
は
の(に)ま
23ウ その・・・つさく―のへにまつさく を―と きえぬへき也
―きえぬへく かやうに・花―かやうにかくやうに花
- 24オ 籠の櫓わらへなり(本行、ただし、わらへ―わらはへ) とい
ふ・・也―といふ つめなる・・の―つめなるやはしの
- 24ウ あらざるにや―あらず
- 25オ 老後(右傍) 事・つねに―事つねに は―と
25ウ 木の名―木名の この哥ふるくきこゆ―かゝる哥そふるくき
こゆる 前斎院 禊子内親王宣旨 禊子内親王 前斎院宣旨 つくるなる。と
イ つくりたりと この―このころの し事なれば―しりたれば
―つくりたりと
- 26オ 草類―草類 とねり―ひねり す・―すきこゆ かち―か
た―たる さるは―さるは
26ウ 申され―よまれ え―も 外官除目―外官奉除目 このゆへ
なり―ナシ
- 27オ きにけり―きたり さるにや―ざるにや よめる―よめるは
27ウ といへる―ナシ みえす―きこえず ために―ため 思へる
哥―思よそへてうた
よめる
- 28オ 玉藻に遊にほとりの―にほとり
28ウ こそ―こそ
- 29オ なんと―ときこえたり―きこゆあさいせられす襲なる詞なれと
29ウ と―に

- 30オ されは―これは 也―は あせ(本行) に―と と―とは
をそよみ―をみるにそよみ かゝれたれ侍れ 秋―くれは―野も
せとは もな―みな 野面―野面水面
30ウ 声―(本行) は。綾―その綾 心にまかすと―(本行) つくは山にこ
―(本行) よめり―よめ いつら―いつこ 金吾判々等好読―
(末尾) 金吾判判につくは山ならこそ口れとてはいかゝと(頭書) 難せられたる
をほかりてかの門弟好説
- 31オ 玉藻に遊同心なり―にほとりおなしこと也 書たる―書たる
は とふ―(本行) もし―よし
- 31ウ 『よる事々の詞』―ナシ に―と ヒヤウ―ナシ アヤマル―ナシ
はなれそに―けるかな―ナシ さしめ―ちらめ いと―いかに お
ほほ―おほう
- 32オ ・父―養父 めや―く・・のめや―くしくかき 哥を―
哥に そは・―そほれたるへし ・世にたると・・うせ
にたるとなむ思つると その―この や―そ
32ウ すれ―うれなく。に―なくといふに よしのなかに―あしつゝの
は―な
- 33オ オホミ―(左傍)
33ウ なんといふふ
34オ なん山の―心を世の―なむなといふふるうたの心を世の な
と―なとを マヘニタテ、―(右傍) もろとも―(右傍) よめ
る―よめる也
- 34ウ かいつく―にこそと―(本行)
- 35オ 事歎―事候歎 までかた―まくかた 云―書 如―候 哥

あまのゝかたの候（本行）を。取ををさし取

35ウ まてかたくイ―まくかた 書出ミダケ―書 沙之―沙 をは―とは

36オ と（左傍） 哥カ―奇 繫綱ツナと 繫綱を 人の―人な

36ウ の・・・思ミて―の装束ミかるくしと思ミて 也ヒ―にや 人に

―人は 六位ミトウリ・六位―六位みとり也六位 五位―ナン

37オ 貫首袍四位叙三位時―藏人頭袍叙三位人 袍ヒ―ナン 叙シ―ナ

シ 除名推量不足言事也―ナン させる子細シく味也―ナン

37ウ 愚痴の―ナン 御ミ―（本行）

38オ ろ（本行） 一同説（本行） 一同之説 但讚岐―但なとこのしうと

めは此哥カのほかふるもあたらしくもよむ人なきにか讚岐 つた

へたる異説也―むすめ伊馬三位の申ウされける異説あり

38ウ かうちめのめ（柳川院御乳母に父之祖母）なといふめの字 とりて―とりてとも

39オ かきたり―かきたり行成大納言は丁年とかきてさくさめのと

しとかくれざりけりとかきたる物あれとこのみをよふ本にはさく

さめのとしとそかゝれたる 古今哥カ―ことうた

40オ 『物いひく心えず』―ナン とかきたり（消去符号ナン）をは

―ナン

40ウ たりし（リ）―たるを すへて―すへては も（ヒ）の名も は定て（ヒ）

は□定て

41オ もと―もと

41ウ けきのあきけ雁かね（イ）いたし―ナン わかせこか（イ）いか―ナン

42オ うちまかせたる―ナン ナーナン

42ウ その本うへ―としてそのうへ 哥カのさまおほかり―おほかり

いたるる―いれらる ならひなれば（ヒ）た（ヒ）の―ならひなればた（ヒ）

の 月のきぬくへからす―ナン

43オ 脂アのむかひすねと―ナン 此語ともすへて不尋常―ナン ひと（ト）も―ひ

とり 哥カ―ナン

43ウ 本集（古集） てこえ（ライ）ぎ―てこら（キ）ぎ

44オ かな（キ）なし―かきなし

44ウ ・・の―かことの （ヒ）も 後代之所見（右傍）

45オ 非其失―非無其失 遺訓―遺孤 最要―抽最要 権中納言定家卿

―ナン

46オ 釈（ヒ）―ナン 夏神―夏かくら

46ウ 侍らむ―あらん ても―侍にても し（ヒ）のにおりはへ―しのお

りはへて

47オ 神楽―神楽は 事―事など 入道―ナン みえ―ナン

47ウ 御屏風―御屏風の

48オ 筆（ヒ）―筆 已（ヒ）―已に 常（ヒ）―常に

49オ 定（ヒ）―定て あらふ―あそふ 庭訓（ヒ）―ナン 合（ヒ）―合 鼓（ヒ）―つゝ

49ウ を―は 作（ヒ）―作候 の―ナン

追記

本稿作成に当り、斯道文庫の平沢五郎先生、川上新一郎先生に懇切な御指導を賜った。厚く御礼を申し上げる次第である。